んだかと思うと、またくもって、軒先（のきさき）の庭石に雪どけのしずくのたれる音が聞こえます。

「のう豊助、自然の力はおそろしいものだなあ。お前がじゅうぶんに計算した強さを、自然はみごとに破ったのだ。今度はお前がその自然の力をはね返す番だ。お前はいつか、この用水路は今作らなければいつできるかわからない、とわしに言ったことがあったな。そうなのだ。今、この用水路はどうしても必要なのだ。しかも、これから何百年もの自然の力にたえる用水路を作らなければならない。だから、お前は死ぬことはならぬ。自然はお前をためしたのかもしれぬ。」

聞いている豊助は恥（は）ずかしくなりました。自分ひとりの気持ちにこだわっている、自分のせまい心が恥ずかしくなりました。この用水路にかけられている、何百年も先までの藩と農民の期待が、身にしみてわかってきました。